

コメディリリック第1回「へ夕に経た」

「明日の僕へ」

登場人物

齋藤 野彦

店員 ペイリー・チャイルド

※齋藤、板付き

モニター

齋藤、目を覚ます

ゆっくりと立ち上がり、周りを見渡す

「僕から、明日の僕へ」

「僕は脳に障害を持っている」

「僕の記憶は一日しか持たない」

「自分が何者で、どこにいるのか、理解できていない理由だ」

「なので、今までの僕と同じように眠りにつく前に明日の僕へメッセージを残す」

「僕は記憶障害以外にもいくつか人と違うところがある」

「そつと手を添えて、耳を澄ましてみる」

齋藤、手を添えて、耳を澄ます

「SE・メロディチャイム」

齋藤、目を開ける

「地下20メートル深くにあるこの部屋から外の音が聞こえただろう」

「僕は驚くことに」

「カマキリの10倍もの聴力を持っている」

「つまり、うさぎの10倍、常識を越えた聴力だ」

「これだけではない」

「SE・銃弾3発」

3方向の銃弾を避ける動き

「3発の銃弾は右、後ろ、真上から放たれた」

「しかし、避けることができたはずだ」

「僕は驚くことに」

「トカゲの10倍の視野を持っている」

「つまり、フクロウの10倍、常識を越えた視野だ」

「そして、僕の反射神経は、ハチの10倍、つまりネコの5倍、常識を越えた反射神経だ」

「僕が特別な能力を持つ人間だという事は十分に理解できたはずだ」

「この能力は全てある目的を遂行するために存在しているものだ」

「僕は一体、何者なのか」

「真実を聞く覚悟があるか？」

齋藤、少しためらいを見せるが次のページを開く

「僕から、明日の僕へ真実を伝えよう」

「僕の正体は」

「すきやの店員だ」

問

「え？」

「SEE・ドーン」

『「すき家」のロゴマーク』

問

齋藤
「嫌だ…嫌だ…嫌だ…嫌だ…嫌だ…嫌だ…嫌だ！」

「SEE・キュービーン」

超能力のように人の気配を察知する齋藤

「SEE・ゴゴゴゴ(ドアの音)」

すきやの店員の服装をした店員が入室してくる

「この頑丈な壁を越えて気配に気づくとは流石だな。コードG」

「M・物々しい音楽—C—」

「エリアマネージャーです。さあシフトの時間だ。私と一緒に来るんだ」

「嫌だ！嫌だ！」

「これが真実だ。君が生まれた意味だ」

「すきやの店員は嫌だ！すきやの店員は嫌だ！」

「自らの運命を受け入れるんだ！」

「離せ！」

齋藤
店員

齋藤
店員

店員

店員

齋藤、店員を突き飛ばす

齋藤 「すきやの店員は絶対に嫌だああああ」

「SE・ガラスが割れる音」

「M・物々しい音楽—CO」

店員 「防弾ガラスが割れた？…ははは。いいか？君のその常識を越えた肺活量は誰よりも大きな声で「いらつしやいませ」とお客様をお出迎えするためにあるんだ！」

齋藤 「違う！」

店員 「君は誰よりも早くお客様に気づき、誰よりも広く店内を把握し、誰よりも正確にお会計を計算する素晴らしい…素晴らしいすきやのクルーだ」

齋藤 「…僕は働かないぞ」

店員 「なぜ、頑なに拒絶する？」

齋藤 「記憶を失くしていても…僕にはわかる。すきやでは…絶対に働いてはいけません！と！」

店員 その駄々っ子こねもいつもの事だ。さあ、こつちへおいで

齋藤 「うるさい！消えろ！」

店員 「もたもたしてると休憩無くなっちゃうよ？」

齋藤 「黙れ！」

店員 「9時過ぎたらタイムカードは10時始まりだからね」

齋藤 「殺してやる！（襲い掛かる）」

店員 「（銃を取り出し放つ）」

「SE・シンシンシンシンシン・パシ」

時空が歪み、銃弾を手で止める齋藤

店員 「ちっ」

齋藤 「（店員を睨みつける）」

店員 「そんな怖い顔で見つめないでください。君は少し勘違いしているようだ」

「M・淡々とした音楽—C」

齋藤 「勘違いだと？」

店員 「わが社、すきやホールディングスでは君の力を必要としている。君のその優れた能力はこの牛井業界において極めて重要だ」

齋藤 「…別の使い道だつてあるはずだ」
店員 「君はここでしか生きていけない」
齋藤 「何故だ！」
店員 「力を持った者の宿命だ。君たちだけが持つ特別な力、通称「ワンオペ」」
齋藤 「「ワンオペ」…」
店員 「君の「ワンオペ」にどれだけの店舗が救われてきたと思つてゐるんだ。そして、今もなお、君の「ワンオペ」を心待ちにしているクルーがいる」
齋藤 「「ワンオペ」…なぜ、僕にこんな力が…」
店員 「君がそんなことを考える必要はないんだ。さあいつものように並盛つゆだくをよそつておくれ」
齋藤 「誰がよそうか！」
店員 「みんな待つてゐるんだ…今日は中野坂上店の仲間が待つてゐるよ」
齋藤 「中野坂上なんか行くか！」
店員 「はは、何を言つてゐる。ここはもうすでに中野坂上店の地下施設だよ」
齋藤 「な…」
店員 「早く上の仲間の元へ」
齋藤 「そんな奴ら仲間なんかじゃない！」

店員 「今日はやけに物分かりが悪いじゃないか」
齋藤 「身体が…身体が覚えてるんだ。「すきや」という言葉を聞く度に全身の毛穴から汗が噴き出てくる」
店員 「そうか、そうか、そうか、わかつたぞ。昨日の東京駅八重洲口店での勤務が応えたんだな。確かにあれは凄惨な現場だった」
齋藤 「無理なワンオペの記憶が体に刻み込まれてる…こんなにあんまりだ…あんまりだよお…これ以上、僕を巻き込まないでくれ！」
店員 「何ができる」
[M・淡々とした音楽—C—]
間
店員 「すきやを失つた君に何ができると言うんだ」
齋藤 「もつと違う道だつて…」
店員 「じゃあ、その違う道とやらを教えてくださいよ」

間(5秒)

齋藤 「…アパレル…とか」

店員 「アパレル!? 君がアパレル!? あはは

ははは! あははは!

齋藤 「何がおかしい!」

店員 「まさか君がアパレル業界で働きたいな

んて…これは面白い冗談だよ!」

齋藤 「僕は…そうだよ! アパレルで働いて!

原宿でキラキラして働いて! 休憩時間に

美味しい牛丼を食べて…」

店員 「充分楽しめたよ。コードG。ありがと

う。君のその可愛い希望をへし折ってあ

げよう」

齋藤 「どういうことだ…?」

店員 「自分の身体の匂いを嗅いでごらん?」

齋藤、自分で体の匂いを嗅ぐ

齋藤 「これは…牛井の匂い!」

店員 「君の汗は、牛井のつゆなんだよ!」

「M・驚愕の事実が発覚した音楽—C—」

齋藤 「なんてことだ!」

転げまわりながら自分の汗を地面にこすりつ
けたり匂ったり

店員

「汗だけではない、君の身体から出る水
分は全て牛井のつゆだ。いつでもつゆだ
くに対応できるようにね!」

齋藤 「くそくそくそくそ!」

店員 「この世界に体から牛井の匂いがするシ

ョップ店員がどこにいますかあ!」

齋藤 「ちくしょう! ちくしょう!」

店員 「あはははは。流石、素晴らしいわが社

の改造技術だ」

間

齋藤 「改造?」

店員 「おっと。まあいい、どうせ明日には忘

れているからな」

齋藤 「僕の身体は…」

「改造してあるんだ。優れた身体能力、

常人を越えた知能、体から噴き出すつ

ゆ。それら全て、我がすきやコーポレー

ションが誇る業界一の科学力で君に与え

たものだ」

齋藤 「なん…だと?」

「M・驚愕の事実が発覚した音楽―FO」

間

店員

「コードG：いやコード牛井。君はすき家で働くためだけに作られた改造人間なのだよ」

「SE・雷」

「L・雷」

齋藤、崩れ落ちる

「M・雨―F―」

「L・少しうす暗く」

店員

「おや？天気が崩れてきたようだね。地下にまで天候を伝える素晴らしい技術だろ？さあ早く出勤しよう」

齋藤、動かない

店員

「理解できただろう？君はすきやでしか生きていくことができない。これが真実だ」

店員

齋藤、動かない

「我が社は今、大変な危機的状況にある。ブラック企業とレッテルを貼られ、ネット民からは罵られ、数々のクルーの離脱により、全国の店舗が経営困難に陥っている。君の力が必要だ。完璧なすきやのマシーンとして働くんだけ。今までの君と同じようにな(笑)」

店員を突き飛ばして外へ向かおうとする齋藤の身体に電流が走る

「SE・電流」

「L・電流」

齋藤

「うわああああああ」
「一つ言い忘れていた」

店員、後方にカプセル型の容器に隠されていた牛井を見せる

店員

「君の体は牛井から10メートル以上離れると電流が流れて爆発する」

驚いた表情を見せる齋藤

店員 「諦めろ。コードG！」

[SE・雷]

[L・雷]

齋藤 「なるほど…ようやく理解できた」

店員 「ようやく理解してくれた…」

齋藤 「あんたの話ではない」

店員 「ん？」

齋藤 「昨日の僕を理解できたんだ」

店員 「何を言っている？」

寝ていたシートの中に隠し持っていた牛井を取り出す

店員 「それは…」

齋藤 「牛井。昨日の僕が残してくれた。これで僕は自由だな」

店員 「バカな考えはやめ…(銃を出す)」

齋藤 「(先ほど受け止めた牛井を指で弾き飛ばす)」

[SE・銃撃]

店員 「がは…さっきの…銃弾」

店員、倒れる

[M・雨—FO]

齋藤、店員に近づき唾を吐きかける

齋藤 「汚ねえつゆだくだな」

店員 「コードG…」

齋藤 「他にもいるのか？」

店員 「…」

齋藤 「僕と同じような人間がだ」

店員 「…ああ」

齋藤 「(何度も蹴ってつばを吐きかける)明日になれば今までの仕打ちもあんたのクソみたいな顔も何もかも覚えてないだろうけど…この憎しみは決して忘れない」

店員 「コードG…」

[M・復讐—C]

齋藤 「許さないぞ。僕の身体をこんなことにしてお前たちに必ず復讐してやる。お前が死のうともこの憎しみは持ち帰る。さようなら、すきやの店員さん」

間

店員

「待ってくれ…コードG…君は…君たちはどう生きるか？」

齋藤

「決まってるだろ。僕たちは」

間

齋藤

「松屋に入る」

〔SE・雷〕

〔L・雷〕

去っていく齋藤

カ尽きる店員

〔L・暗転〕